

一九五八年にはトロントで両派合同の展覧会を開いた。ペインターズ・イレブンのキャンバスの横に、ベルフルール、ホルデユア、デユムシエル、イーウエン、マッキューウエン、ペラン、ピッチャー、リオベル、トナクールといったモントリオール派の面々の作品が並んだ。これらの若い画家の間に革命と献身の確固とした前線が築かれたことは、カナダ絵画史の上でもきわめてユニークなことである。

ペインターズ・イレブンの基調である抽象的表現主義には、フランス語系モントリオール派に見られる民族的熱情が欠けている。彼らが特に関心をもったのは、



カズオ・ナカムラ作「山脈」 The National Gallery of Canada, Ottawa

官能的生活である。オスカー・ケイヒンの打ち出した調子は、グループ多数者の共通分母ともいえるものだったが、グレイの地に色彩を散らした彼の抽象画などを見ると、豆のさやがはじけるといった自然の結実と関連した現象に啓示を受けているように思われる。芸術表現の領域では恋愛やセックスが依然として大事な役割を果たしているが、トロント派ではこれが官能的な形で現われる。モントリオール派でいえばペランの傑作に見られるのと同じ傾向だ。トロント派には、恋愛以外の人間の情動を主題とした画家も二、三いたが、アランのもつ純粋なリネズムはトロント派にほとんど見られない。

イレブン派の中で最も特徴のあるのは、あの不遜な画家ハロルド・タウンであろう。極端な自己吹聴癖、天才、派手なシヨーマンシップなどが重なりあつて、独特なパーソナリティを形成している。新聞の見出しに何度も顔を出すのも、そのせいだ。うわべの騒々しい陽気さの陰には、砥ぎすまされた感性が隠されていることが多い。タウンはトロントの伝道者にふさわしく、芸術家は自由に自己を表現しなければならぬと説いて回り、そつげなく性急に、怒髪をふり乱して、伝統のくびきからの解放を闘っている。想像力に満ちた彼の精神は、周囲の環境を素材に革命的作品を生み出す。たとえばいくつものきちんと構成された、独創的な作品シリーズは彼の身の回りの環境から生まれたものだ。街の通り、交差する高速道路、陸橋などが、白をバックに暗い迷路

のように描き出されたりする。また、北欧のバイキングや東洋のモチーフを使った一連のすばらしいシール(飾り切手)は、ロイヤル・オンタリオ博物館でヒントを得た作品だ。カラーシユの傑作「カレリーに捧ぐ」は、同博物館創設に尽力した人物をたたえて作ったもの。題材にはバックス祭あり、風景あり、スペインのドンファンまである。

タウンのトロントへの固執は、ほとんど盲信ともいえるほど強いもので、ほん



ハロルド・タウン作「静水の舟」 The National Gallery of Canada, Ottawa

の短期の旅行にもトロントを離れるのを嫌った。彼は自分に必要なのは一つだけだと言いつける。一つとは、自分の住む周囲の環境の中で変化していく現在の生活と、ロイヤル・オンタリオ博物館で発見したような古代である。タウンは時代の寵児、アリアドナであり、同時に芸術の巨匠である。空想力を刺激するものであればどんな媒体でも作品化し、展覧会場を庄する大型の絵でも、色の素晴らしいシルクスクリーン、エッチング、カラーシユあるいは彫刻でも同じように自由になす。

ペインターズ・イレブンの大多数に本

質的な特徴として、燃えるような色彩の華麗さがある。ジャック・ブッシュの巨大なキャンバスは淡々と描かれてはいるが、その単純で圧倒的な色彩部分は抗しがたき魅力をもつ。抽象表現派のトム・ホジソンは、デクーニングを思わせる精神的な筆致で形を描く。イレブン派ではないがこれに近いカウトリーは、ヌードを描く場合など、造形的要素がホジソンより強く出る。カウトリーにとって絵を描くことは一種の官能的行為であり、したが

って自分の芸術に個人的に埋没する傾向をもつ。それに対してホジソンの絵は、絵の具をたたきつけるという行為そのものに肉体的エネルギーを発散させているように思われる。このほか、ペインターズ・イレブンの興した傾向を追う若い画家には、星雲に似た抽象画の傑作を描くヘドリック、鮮やかな色彩のメレデイス、実験的なゴーマンなどがある。ペインターズ・イレブンは一九六〇年に解散したが、その偉大な影響力は、いまだにトロントの美術界に続いている。(Painting in Canada, by J.Russell, University of Toronto, Press 1966 より抜すい)